

## 第4回 千葉市発達障害者支援連絡協議会 議事録

I 日 時 平成23年2月1日(火) 10:00～11:40

II 会 場 千葉市中央コミュニティセンター8階 千鳥・海鷗

### III 出席者

(委 員) 杉田委員、碓氷委員、菊池委員、久保田委員、小林委員、中田委員、  
夏目委員、野口委員、鈴木(健)委員、鈴木(正)委員、山口委員、  
高井良委員、岡田委員、伊藤委員、加瀬委員、神津委員、 計16名  
(事務局) 発達障害者支援センター：加瀬支援員、仲村支援員  
(所管課) 障害者自立支援課：矢部課長、大塚主幹、松田係長、岡本主任主事、  
柴崎主事、丸木主事  
(オブザーバー) 千葉市療育センター：岩村事務局長、千葉市桜木園：柿沼園長

### IV 配付資料

- 千葉市発達障害者支援センターの実績報告について 資料1
- 発達障害者支援の今後の方向性(案) 資料2
- 「発達障害者支援の今後の方向性(案)」の補足説明について 補足資料
- 「発達障害者支援の今後の方向性(案)」に係るご意見票 別紙
- 千葉市における発達障害者支援のあり方について(平成19年12月) 参考資料
- 世界自閉症啓発デーin ちば チラシ

### V 議事概要

#### (1) 千葉市発達障害者支援センターの実施状況について

発達障害者支援センターの実績報告について、資料1のほか、中田委員から補足説明がなされ、質疑応答が行われた。

#### (2) 発達障害者支援の今後の方向性(案)

発達障害者支援の今後の方向性について、資料2に基づき、所管課より説明がなされ、協議が行われた。ほかに意見がある場合は、別紙にて提出することとした。これらの意見を取り纏め、次回の協議会で再度提示することとした。

#### (3) その他

事務局より、議事録の確定方法について、座長に確認のうえ確定・公開する案が提案され、出席委員多数の賛同により承認を得た。

### VI 会議経過 別紙のとおり

(別紙) 第4回 千葉市発達障害者支援連絡協議会 会議経過

○ 事務局（加瀬）

～開会、資料確認～

○ 矢部課長

障害者自立支援課長の矢部でございます。

本日は、ご多忙のところ、また大変お寒い中、発達障害者支援連絡協議会にご出席いただきまして、誠にありがとうございます。

また、皆様方におかれましては、日頃より本市障害福祉行政各般にわたり、ご理解・ご協力をいただいております、重ねて御礼申し上げる次第でございます。

さて、当連絡協議会は、発達障害者に対する総合的なサービスの在り方や、関係機関との連携体制の確立、また、関係機関が抱える諸問題への対応を、専門的に協議・検討するため、平成20年7月に開設し、本日で4回目の開催を迎える運びとなりました。

この間、特に昨年度におきましては、ライフステージごとの一貫した支援を推進することを目的とした「ライフサポートファイル」を作成するにあたり、当協議会で活発にご議論いただきましたことにより、大変素晴らしいものが作成されました。この場をお借りいたしまして、改めて御礼申し上げます。

このライフサポートファイルをさらに普及させるために、これまでも関係団体や関係各課に対しましても、趣旨説明と周知徹底を行ったところでございますので、委員の皆様方におかれましては、このファイルが幅広く普及されるよう、引き続き御協力いただきますようお願い申し上げます。

また、本市の発達障害者支援の拠点施設でございます「千葉市発達障害者支援センター」でございますが、開設から概ね3年が経過いたしました。関係機関とのネットワークの強化が着実に図られるなど、支援の「芽」は着実に成長しているものと認識しております。

本日は、この支援の「芽」をさらに大きくするために、最近の国の動向等も踏まえまして、今後の方向性につきましてご議論いただくとともに、発達障害者支援のあり方等に関して、それぞれのご専門の立場から多様なご意見を賜りますよう、心よりお願い申し上げます。

以上、簡単ではございますがご挨拶とさせていただきます。どうぞよろしくお願いいたします。

(所用により退席)

○ 事務局（加瀬）

～新委員紹介、座長選任（事務局案：杉田委員承認）～

それでは、次第の5議題に入らせていただきます。以降の進行は杉田座長にお願いいたします。

○ 杉田座長

それでは議題に入らせていただきます。まず、千葉市発達障害者支援センターの実績報告について、説明をお願いします。

○ 中田委員

千葉市発達障害者支援センターの中田でございます。

資料1について、数値的な部分については、あとでゆっくりご覧いただくこととして、ここでは少しお時間をいただき、千葉市独自の取り組み、千葉市発達障害者支援センターの特色について、ご報告させていただきたいと思います。

まず、就労支援についてです。

就労支援については、支援センターの就労支援員が中心となって行っていますが、障害者職業センター派遣のジョブコーチとして、支援をさせていただいております。例えば、支援センターに就労相談にきた方たちについて、関係機関を経由して就労に結びついた場合、支援センターの就労支援員が、職業センターのジョブコーチとして、企業に入って継続した支援を展開しています。このような流れがやっとできてきたところです。

また、企業内にジョブコーチとして入ることによって、実はその他の職員のことで相談を受けたり、企業内での発達障害に関する研修依頼を受けたりしています。

就労支援員が、職業センターのジョブコーチとして対応しているケースは全国的にも少なく、少なくとも関東甲信越では千葉市のみの取り組みとなっています。千葉市の取り組みとして報告できるものの一つでございます。

次に、機関支援の一環として、桜木園園長の柿沼先生を中心として、療育相談所の言語訓練士や心理判定員、支援センターの臨床心理士や社会福祉士、千葉市から保健師や養護教育センターの先生の協力を得て、モデル的に、幼稚園・保育園3か所を訪問し、専門的なスタッフが行動観察をしながら、園の職員や保護者の方の相談に対応するような取り組みを実施しました。地域の関係機関への連携体制を構築することを目的としています。1月27日に3か所目を終え、これから総括をする予定です。来年度どうするか、ということもございますが、取り組みとしてご報告いたします。

最後に、ライフサポートファイルについて、基本的な枠組みは出来上がりましたので、利用者の意見を聞きながら、その都度修正を加え、さらに良いものにしていきたいと考えています。

まだまだ取り組まなければならないことがあることは十分承知していますが、支援センター開設4年目を迎えまして、ようやく千葉市の特色についてお話しできるものもでてきましたので、ご報告させていただきました。

来年度については、新たな取り組みとして、特に自閉症協会やコスモのご意見を伺いながら、ペアレントサポート、ペアレントトレーニング等について、事業化に向けて検討したいと考えています。

○ 杉田座長

ありがとうございました。ただいまの報告について、ご意見ございますか。忌憚なくお願いします。

○ 菊池委員

さきほどお話のありましたモデル事業について、もう少し詳しくお話しただけですでしょうか？

○ 中田委員

内容については、各組の行動観察と、保護者 30～40 名に対してドクターからコミュニケーションに関する講演会を行いました。それと、養護教育センターの先生からも、就学にあたって、ということで、養護教育センターの事業概要等の講演会も行いました。

目的は機関支援ですので、現場の先生方の気づきの部分や、ちょっと心配なお子さんへの対応ということになります。人権の問題もあるかと思しますので、診断を促すこと等はむづかしいところがあります。こういったことを踏まえながら、保護者から相談があった場合に、支援センターへつなぐような連携体制の構築を図りました。今後は、その反省会を踏まえまして、来年度以降の対応を考えたいと思います。

○ 杉田座長

ほかにありますか。

○ 夏目委員

障害者職業センター、キャリアセンター、ハローワークの連携についてのお話がありましたが、より充実させるために、いまある問題に対してすぐに手が打てるというような対応が必要かと思えます。例えば、就労した先でトラブルがあったときに、企業や本人は、いま調整をしてほしい、対応してほしい、ということもあるかと思えますが、リアルタイムで支援センターの職員が対応するのは困難な状況ではないでしょうか。そうして課題を抱えたまま時間だけが経過し、課題が大きくなってしまいう現状というのはあって、さらに充実、タイムリーな行動ができると、なお有難いと思っています。

○ 中田委員

おっしゃるとおりです。支援センターの就労支援員は一人で動いているところですが、すぐに対応する必要性が高い場合もあります。しかし、相談の予約状況によっては、対応できていないこともありますので、支援センター職員全員で対応できるような体制作りについても考えていきたいと思っています。

○ 菊池委員

資料1の表面の発達支援と相談支援について、支援の項目がざっくりしておりますが、これまでの蓄積を踏まえて、千葉市としてはこんな課題があるんだとか、支援センターとしてもここに力を入れていきたいというのがあれば教えてください。

また、裏面の普及啓発のところの、講演会のテーマについて教えてください。相談を受けて見えてきた課題とテーマがリンクしていますでしょうか。

自閉症協会としても、講演会のようなものは開催していて、自閉症の理解については、ある程度分かってきていただいていると思っています。次は、こういった障害の特性を踏まえたうえで、親は育てていかなければいけないし、支援をうけたいと思っています。それでは、具体的にどうしたらよいのか、こんな支援の仕方がある、ということ話す時期にきていると思います。こういった点については、支援センターとしてはどうお考えでしょうか。ニーズと展開についてです。

○ 中田委員

これまでの取り組みを踏まえて感じるのは、発達障害に関する成人の検査診断ができる機関が極めて少ないということです。子どもに関しては、療育相談所や子ども病院を紹介できますが、成人については千葉大くらいしかありません。また、検査診断のみでは受けてくれない先生もいるようです。これは課題の一つとして認識しています。できれば、療育相談所のほうで、月1回でも良いから対応できないか、ということもありますが、現状では対応できる見込みはありません。

また、普及啓発については、基本的な発達障害の特性に関することや医学的視点からの発達障害の講演会を開催しています。今後については、もっとターゲットを絞り、10名でも20名でも良いので、より具体的に、困っていることに役立つような講演会をやりたいと思います。特に、ペアレントサポート等については、来年度取り組みたいと考えています。

○ 杉田座長

ほかにありませんか。

○ 碓氷委員

特別支援学校ということで、地域における特別支援教育のセンター的役割を担っています。近隣の学校から、特に高等学校の先生方が悩んでいるケースが多く、相談依頼を受け、支援に行きます。ただ、自分のみでは対応しきれないケースが多いため、発達障害者支援センターにも相談できる旨、紹介してよいものなのでしょうか。

また、就労に関しては、3年生になる前から相談を受けていますが、なかなか就職まで実らないケースが多いです。就職できないまま、卒業するケースも多い現状です。保護者はもちろんですが、本人が一番悩んでいると思います。関係機関と連携を、ということですので、皆様とも連携させていただいて、情報共有したいと考えているのですが、対応していただけるものでしょうか。

○ 中田委員

是非よろしくお願いします。

○ 杉田座長

とにかく関係機関が協力しあって、前向きにすすんでいくべきだと思います。

時間の関係もあるので、次にすすみます。千葉市発達障害者支援センターが開設されてから約３年という一区切りが経過したところでありますので、これまでの経緯を簡単に振り返るとともに、今後の方向性を議論する必要があります。

そこで、所管である障害者自立支援課とセンターが協働して、今後の方向性の案を作成しています。これを、プラン、たたき台として、活発な議論ができればと考えています。それではよろしくお願いします。

○ 事務局（岡本）

～資料２の説明～

○ 杉田座長

熱弁をふるっていただきありがとうございました。皆さん、いかがでしょうか。あくまでもたたき台でございますので、これをもとにして、今日だけではなく、現在進行形あるいは未来進行形でより良いものができればと思っています。課題が山積していることは言葉以上ですが、できることからやっていけばよいとも思います。いかがでしょうか。

○ 鈴木（正）委員

15 ページの部分で、早期発見はかなり前から行われているものと思います。注意集中障害や多動等については、発達障害とひとくくりにされましたが、教育機関で事例の蓄積もあると思いますし、各関係機関の責任というのもあると思います。

早期になればなるほど、リスクというものをどのように背負っていかなければならないのか。ただ、一般社会の生活に戻るような事例も見えています。これからは連続してみていかなければならないと思います。

○ 杉田座長

こちらについて、何か意見はありますか。できれば、たたき台に関する意見を優先してお願いします。

○ 碓氷委員

高等学校の例を申しますと、保護者の受容について、本人は受容していませんが、特に保護者の受容に３年かかったケースがあります。３年生の段階で、何とか受容はできたものの、就労先はすべて断られてしまいました。夏にある研修に行きまして、発達障害だと就労できないということです。療育手帳や身障手帳だと就職できます。そういうことを頭にちらつかせながら、そういうケースに対応したこともあります。保護者の方には、卒業してもご利用ください、とか、障害のある方が働くために、と

いうパンフを活用しながら、あきらめなくていいんだよ、という話をしました。しかしながら、卒業後は手を引かざるを得ない、ということもありました。

○ 杉田座長

ほかにありますか。養護教育センターの委員にお願いしたいのですが、ライフサポートファイルの個別支援計画の部分について、修正意見等ありますでしょうか。

○ 加瀬委員

相談記録等の資料、という見出しでは、どの教諭も「ん？」と考えてしまうと思います。各種検査や面接結果をお渡しすることはできますが、この部分は、やはり言葉をうまく作った方が良くと思います。

個別指導計画というのは、一人ひとりの子どもたちの現状と今後の対応策を担当が作るものです。特別支援学校、学級の生徒たちは一人ずつ作るものですが、通常学級の子どもたちについては、すべての子どもたちについて、発達のつまづきに気づいてそこまで対応できていません。つまり、個別指導計画の写しをください、と言われても、それは作っていない、ということもあります。担任と保護者の間の了解に基づき作るものもありますが、担任の先生が個人的に作っているもの等について、了解をとっていないものを提供することは困難です。

個別支援計画については、まさにライフサポートファイルと同じようなものですが、こちらについては、作成していない先生、学校もかなりあるのが現状です。また、小学校と中学校では教育環境がかなり違いますので、こういう資料を提供することは難しいという感じがします。

保護者が了解している、いわゆる発達検査の結果のようなものの写しを差し上げることはできますが、ファイルの書き方については、もう少し考える必要があると思います。それと同時に、子どもたちの将来にとっては必要なものであるから、そういった観点からも考える余地はあると思います。

○ 杉田座長

個人的な意見を申し上げますと、学校関係は、外圧を与えないとなかなか動かない現状はあると思います。したがって、ライフサポートファイルを一つの突破口として、何が優先事項なのかを学校にも考えていただきたいと思います。私は、小児科医をやっていますので、養護教育センターにも行くことができますが、医療や福祉では、個別的な支援をベースにし、学校は集団をベースにしていると思います。

これは極めて大きな問題で、発達障害児は学校にいる時間が多いわけですから、学校が個別支援をやることにならざるを得ないでしょう。集団の観点も必要ですが、個別の、つまりインディビジュアル・エデュケイショナル・プランニングをやっていたきたいと思います。是非こういった考え方を普及していただきたいと思います。そのために養護教育センターにも、この協議会に入っていただいています。加瀬委員からもお願いできればと思います。

また、このファイルが、学校関係で受け入れられていない事例も聞いています。これは母子手帳の一生版というイメージです。母子手帳まではいかなくても、必要なお

子さんにはこのようなファイルを作り、就労するまでもっていくことによって、医療や福祉の現場はとても助かるわけです。これに学校側も協力するような体制が望まれます。

#### ○ 菊池委員

いまの加瀬委員のお話については、保護者が障害を受け入れられていない場合の対応についておっしゃったものと思います。このような方については、特にどのような文面が良いのか、お困りのことはあるかと思います。

しかし、その前段階が大切なのではないでしょうか。保護者の方から資料提供をお願いされる前の、先生と保護者のコミュニケーションが重要だと思います。そこに至るまで、どのように対応をとってきたのか。いきなり「個別指導計画をくれ」と言われるような関係になってしまっていたら、それは失敗だと思います。親御さんは、担任の先生はわが子をどのように理解してくれているか、学級の中ではどうなのか、そのようなコミュニケーションがとれていれば、いきなり個別指導計画をくれ、とはならないと思うのです。担任の先生が親御さんやお子さんのことをきちんと理解してくれていないときに、そういったことになるのではないのでしょうか。

これについては、養護教育センターが中心となって、他の先生方にもお話しいただきたいと願っています。保護者に対しても、教育委員会からのアプローチもほしいと思っています。また、わたしたち親の会としても、ファイルをどう理解して、どう使っていくのか。「使ってね」と言ってもなかなか親は書かないと思うし、ファイルに関しては、お互いに勉強会が必要だと思います。

#### ○ 杉田座長

ほかにありますか。資料を見ると、センターの役割もなかなか大変かと思いますが。

#### ○ 中田委員

支援センターとしても、資料にあるような取り組みができればいいと思っています。まずは、どうすればできるのか、その方法論を考えていきたいと思っています。

例えば、ペアレントサポート等については、外部の講師を読んで開催したりすることもできると思います。PEP-Rにしても、療育相談所を巻き込んで、センターと一緒にできればと考えています。また、障害者職業センターやキャリアセンターにも、職業に関する適性検査がありますので、支援センターと就労系機関が連携して、どうすればできるのか、一緒に考えていきたいと思っています。

#### ○ 菊池委員

PEP-RやAAPEPについては、どこで実施できるかを支援センターがつかんでいけば良いとも思います。千葉市内のどこで実施できるのか、そこを広めていくことも大事だと思います。療育相談所には、臨床心理士の先生もいらっしゃいますし、障害者相談センターでも、AAPEPが実施できるようになれば、協会としても嬉しいことです。療育手帳の診断以外には、相談したことはありませんけれども、名前は障害者



相談センターなので、相談しても良いんだな、と今思いました。

いずれにしても、まずは AAPEP 等がどこで実施できるかを調べていただいて、支援センターから検査をお願いする可能性がある、ということを広げることが大事かと思います。例えば、私のこどもは 20 年前にこども病院で PEP-R を受けています。20 年前からある検査なのです。

また、発達障害の子どもたちは、「いびつ」です。知的障害のある子は、低い部分を上げていくことはできると思いますが、発達障害の子どもたちは、低いところをつけばつくほど、二次障害が発症することになります。ですから、どこを伸ばしたらよいか、そういったことを判定するのが、PEP-R です。この検査には「めばえ」という項目があり、それを伸ばすための検査になります。

それと AAPEP については、成人期の方に対して、そのひとの生活を丸ごと見ることになって、保護者の方もこれに加わることが大きいです。少なくとも、担任の先生任せにしないということになります。この検査には、家庭尺度というのがあり、これは保護者の方が記入するものです。さらに、専門家のアドバイスも受けられるような、フォーマルな書式もあります。この検査は、是非実施できるところが増えてほしいと思っています。CAS（県のセンター）では、特別な人に対しては実施している検査です。全員にやってください、とは言いませんけれども、少なくとも困難ケースについては実施できるような体制ができると良い、これを望みます。

#### ○ 杉田座長

ほかにありますか。発言されていない方もいますが。検査についていかがですか。

#### ○ 中田委員

検査については、支援センターでも実施できれば良いと思っています。どこでやっているかの把握も含めて、ほかの関係機関と連携しながら、調査していきたいと思います。

#### ○ 鈴木（正）委員

PEP-R の内容を見ますと、療育手帳の交付や、その他の相談で直接使われていない項目かとおもいます。ほかの機関での検査と思われますが、とりわけ、手帳交付に関しては、全国的にも知的障害者更生相談所では使われていないと思います。

#### ○ 菊池委員

その子の支援をどうするか、ということを考えるときには、その子をどう見るかが大事です。どうしても行動問題に目が行きがちになってしまいます。その子をしっかり見るときには、PEP-R 等の検査をいろいろな機関で実施することができて、それをもとに相談ができると良いと思います。障害者相談センターや児童相談所でも実施できると良いです。また、AAPEP については、成人の支援をしているところでやってほしいと思います。市ができないということであれば、自閉症協会が頑張らなきゃいけないのかな、とも思っています。何もできないまま、行動障害の子どもたちが増

えるだけになってしまいます。これでは、発達障害者支援は名前だけになってしまいます。行動障害に対応しているだけで疲弊しては、本末転倒だと思います。養護教育センターでも支援センターでも、どこでも、問題行動がでてきたときに相談にいった、問題行動をつぶそうとする。すると、他の問題行動がでてきてしまい、何も解決していないような事例をいくつも聞いています。千葉市としてこのままで良いのか、と思います。むしろ、その子どもをどう見て、どう支援するのか、それを誰がやるのか、明確でなければならないと思います。

先日、立川で、4歳のお子さんをお母さんが手をかけた事件を見ました。この記事を見たときにドキッとしました。自閉症協会の会員に、こういった悩みを抱えている保護者はいないか。そう感じました。親御さんが将来、「ああ、あのときに手をかけておけばよかった」と思うような千葉市であってはならないと思うんです。

#### ○ 杉田座長

なかなかむづかしい問題です。ただ、公的機関がやれること、家庭がやれること、社会がやれること、それぞれが役割分担をしながら良い方向にもっていきたい、というふうに思います。忌憚のないご意見をいただきながら、行政にも、支援の枠を広げていっていただきたいと思います。

柿沼先生もいらっしゃっていますが、5歳児健診等も含めて、何かありませんか。

#### ○ 柿沼園長

医学的な診断については、ご存じのようにDSMで、医師が診断に慣れていればそれで良いと思います。大事なのは、診断よりも支援をどうするかということです。

支援についても、その目標を皆さんがどのように共有するのか、というのが大事です。学校にいけばそれでOKというわけでもない。もっと大きく、世の中でどういうふうになればいいのか、ということになります。

これは国民的な合意、我々は何のために生きているのか、何のために学校に行っているのか、ということにもなりますが、そういった共通認識がないと、支援の目標がどこにあるのか、それぞれの機関ごとの判断によることになってしまいます。

この連絡協議会では、子どもから大人になるまで、こういう問題を持っている方たちをどういう状態にするために支援をするのか、ということが話し合えれば良いと思います。そういう発想があれば、どのライフステージでも、どの場面で、どの程度の支援が必要なのか、おのずから答えがでると思います。

二次障害に関しては、早期発見をして、少なくとも、これから生きていくために自分はここにいて、人の役にたっているんだ、ということが生きていく原動力となると思います。

皆さんをびっくりさせるかもしれませんが、広汎性発達障害のある子が生まれて、すぐにその環境が悪かったとすると、診断としては早期に発見できることもあります。そういう視点からは、産まれた瞬間から支援が始まるといえます。家族が受け入れられるような形で、専門家や周囲がその家族を支援しながら、本人ができるだけ良い環境で暮らせるようになると良いでしょう。この協議会では、そういったことも皆さん

で共通認識としてもってほしいと思います。

○ 杉田座長

ありがとうございます。それでは時間の関係もございますので、ほかにご意見がある場合は、所属機関に持ち帰り検討いただき、障害者自立支援課に、書類でご提出ください。これらの意見を取りまとめ、反映させたものを次回の連絡協議会で提示してもらいましょう。事務局からほかに何かありますか。

○ 事務局（加瀬）

本日の議事録についてですが、杉田座長にご確認いただいたうえで公開することとしてよろしいでしょうか。

（賛成多数）

ありがとうございます。事務局からは以上です。

○ 杉田座長

それでは協議会全体を通して何かありますか。言っておきたいこととか。今日の今日のみではなく、何かあれば事務局にお伝えいただくようにお願いします。それでは議事を終わりにします。

○ 事務局（加瀬）

委員の皆様方、長時間にわたり、ご議論いただきありがとうございました。以上をもちまして、第4回千葉市発達障害者支援連絡協議会を終了させていただきます。本日は大変お疲れ様でございました。